

見沼田園保護の現代的意義～不易流行

菊地 真（カイロ大学前教授・文学博士）

はじめに 現代日本は何を見失っているか

まず日本古典文学の専門家として、現代日本が「古典」を見失っていることを指摘したい。古典とは、古典教育とは何か。多くの人々がそれを日本古典研究者養成の予備課程と誤解している。専門家にならない学習者にとって本来不要の科目ながら、入学試験の科目にあるから、あるいは大学の必修科目にされているからしかたなくつきあわされている、と。こうした人たちは二つの誤解をしている。

その一つは「古典」と「中学・高校における古文科目」の混同である。本来、普通教育あるいは学部教養課程、また日本語教育の一環における古典教育とは文学・史学・語学研究者を養成することを目的とする課程ではなく、その目的は文化財創造につながる日本語創作能力の涵養にある。それに関係ない「古いだけの文献」は、教育の対象たる古典ではない。だから「古典」は自称国語教師に強請されて学ぶものではなく、個人が「これが自分のお手本」と自主的かつ自発的に選ぶものなのである。

もう一つは「古典」とは文献に限るという誤解。古典とは有形無形の文化財創造をインスパイアするものだ。それをできるものは、文献に限らず「古典」なのである。芸能・遺構・遺物そして田園であっても「古典」。以下、野良の藝術活動が、見沼田園を『古典』たらしめていることを論証しよう。

不易流行～古典とは何か

「古典」とは何か。古典作品の中にその答えがある。その定義を松尾芭蕉の弟子・向井去来が「去来抄」で「不易流行とはすべてに通ずる哲学…不易を知らなければ依って立つ基盤が失われ、流行を

知らなければ時代に取り残される」と芭蕉の教えとして述べている。つまり「不易」とは古来より大切に守り続けられたもの、「流行」は現代のトレンドで、有形無形の文化財創作は「不易」の基盤の上に「流行」を展開していくべきものと。同じく芭蕉の弟子・服部土芳はこう述べている。

芭蕉師の俳諧には、永久に変わらない価値をもつ要素もある一方、時代により可変な要素もある。俳諧の道はこの二つに尽きるのであり、二つの根本は一つである。その一つの根本というのは俳諧の道の真実である。不易を知らなければ、本当に俳諧を理解したことにはならない。不易というのは、新しいとか古いとかによるのではなく、時代の変化や流行に目もくれず、俳諧の道の上に毅然と立っている作品の姿を言うのである。…「かりにも昔の人のよだれをなめるような真似をするな。四季の変化して行くように物事は変化する。俳諧もすべて物事はこうである」とも、芭蕉師はおっしゃった。（服部土芳『三冊子』『赤冊子』）

「流行」は、現代と異質な「不易」を意識し続けることにより現代を相対化する術を会得した者がとらえることができるのだと、芭蕉から教わったと述べている。言葉を換えれば、不易＝「古典」は、現代人が創作する発想を生み出す為にある。芭蕉師弟は「単に古い文献」を不易＝「古典」とは認めていない。

『三冊子』は、芭蕉の強烈な詞を伝えている。不易＝「古典」を学ぶ意義は創作のためで、古人のよだれをなめるためにやるなど。現代の自称国語教師の耳朶を打つ戒めである。文化財創造につながりもしない文法説明を、「大学入試に出題されるから…」などと学習者を脅すことで聴講を強いる営為は「古典教育」ではなく、「古典」の名を汚す破廉恥きわまる犯罪である。「古典」を古典たらしめているのは、いま、ここにいる現代人の文化創造活動なので、まず古典があって次に文化創造があるのではない。

野良の藝術活動の意義～文化財創造活動こそ『古典』を認定する

以上の考え方を、野良の藝術活動に当てはめてみよう。野良の藝術活動は、数百年間続く見沼の地で、見沼古来の生産方針を不易の手本としつつ、そこから新しい芸術を創作している。要するに、見沼を不易＝「古典」たらしめているのは、野良の藝術活動という創作なのである。創作とは、現在の自分を発見し続けるという現在形でなければならない。

「野良の藝術」というと、宮沢賢治「雨ニモマケズ」のような近代詩を思い浮かべる人も多いだろう。

雨ニモマケズ 風ニモマケズ 雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ 丈夫ナカラダヲモチ

慾よくハナク 決シテ瞋いかラズ イツモシヅカニワラッテキル …

実は一見「野良の藝術」の「雨ニモマケズ」には、経典文言・故事来歴が行間に隠されており、不易＝「古典」を踏まえてこそ輝く「流行」なのだ。いっぽう百人一首第一首歌も「野良の藝術」とはいえないか。

君がため春の野に出でて若菜つむ わが衣では露にぬれつつ
(天智天皇)

古典中の古典「百人一首」冒頭歌は、帝自らが野良の作業をする＝流行という趣向なのである。

要するに野良の藝術の実践こそ、見沼田園を「古典」たらしめる大神呪、大明呪、無上呪、無等等呪であり、愚かな開発計画をよく排除する不慮の真実なのである。

再度問う、古典とは何か。有形無形の文化財創造は、まったくのゼロから生み出されることはなく、『何か』から造られる。『何か』とは、太古より人々の心の奥底にあり、感動を起こす原動力となりうるもの。それを古典というのである。ゆえに、まず古典があって

次に文化財創造があるのではなく、絶え間なき文化財創造のいとなみが、『古典』を認定し続けるのだ。

私は見沼田園がただ古くからあるゆえ古典であり、ゆえに守れというのではない。野良の藝術のいとなみが今日も続く限り、見沼田園は『古典』であり続けている、ゆえにそれを破壊することは許されないと主張するのである。